

## 日々CL好日

(年取るといふこと日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子 amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2011/2/16

自宅から40分ほどウォーキングして目的地周辺の道を歩いていると、ママチャリに乗った30代の女性が追い越しながら「こんにちは一」と元気な声で挨拶した。朝の10時でほかに人通りはなく、こんなところに知り合いと会うことはないのにだれかしらと思ひ、ともかく「こんにちは」と返した。笑顔で振り返った丸顔の健康そうなその女性は「あ、すみません」と言ひて走り去った。人間違ひだったのだ。こんな嬉しい有り難い人間違ひならいつでも大歓迎と足元を見ていた目をふと左上にうつすと、頭ほどの高いブロック塀の上に黄金のネコが、冬の太陽の光を燦燦と浴びて寝そべって、人のほうを見つめていた。そこを通り過ぎた途端、蒼井優に似た美しい清楚な女学生とすれちがった。目的地の寺の裏門をくぐると白梅の古木が三本咲き誇っている。坂下の小さな墓石にどっさり束になつてだれかが供えたばかりの春の花が目に入った。こんな朝こそ「日々是美しき日」と云うのだらう。

4/16

JR秋葉原に向かつての電車内。二十歳そこそこの若者、茶髪ショートモヒカンヘア。皮風ダウンジャケットに黒の太いベルトをしているが腰からずり落ちそうな新しいジーンズ。どうぞ摺ってくださいと言わんばかりにヴィトンの財布をお尻のポケットから顔を出させている。つり革に手を上げるとジャケットの裾下から鮮やかなコバルトブルーのシャツの裾が見え、ベルトの腰上からアメリカの国旗のような赤青の奇抜なデザインショーツが覗くというより、ショーツの4分の1ほど見える。電車内の観察でこれほど楽しんだことはない。ひょっとしてピアスをしていたら完璧と右耳を見ると、してなくてがっかり。いや男の子だからと体を動かすチャンスを狙って左耳をみると案の定銀色のピアスをぶら下げている。「えらいっ!完璧、ありがとう」と思はず心の中で叫んだ。

4/22

変化の少ないいつもの通りを湧いてくる雑念と周りに注意を向けて歩いていると、小一の男の子が黄色帽子をかぶってチャリンコに乗って「はるみっけー」「春〜」と宝探しゲームをしているように嬉しそうに笑顔で右に左にこいでいる。男の子が見上げた上には木瓜の花、下のへいの角には小さなタンポポ一輪。すでにこの男の子は観察の宿題「春を見つけてみる」を実践している。春のような男の子から春の変化を教わった。

5/12

小学校2年の男の子二人が下校中、一人が「オレねー、何回も病院で手術したの」「へえーどうして」「赤ちゃんのときね、〜が丸くて」「救急車に乗ったりもしたよ」「乗ったことあるの?」「病院についてげろしちゃって」「それで、どうしたの?」「〜が車で迎えにきてくれて、遠くの〜に行ったの」「ふーん、あつ、じゃーね」と二人は笑いながらさよならをした。大人だったら深刻に捉えてしまう話の内容。小さな子どもは自然なままで事実フィットして次になすべきことに向かう。「偉いな」。

6/05

前方から髪をひつつめた男にも女にもみえる人がぞうりをひっかけ歩いてくる。両足の間から馬に似た尻尾が揺れて見える。すれ違って振り向いたら、男性で道路まで届く長さの髪を束ねている。男性では珍しい長さで、尻尾に見えても不思議ではない。と自然な錯覚に納得した。

6/05

ウォーキング中、知人に「被災地で喪服がないので、捜している」との話を思い出して、私のサイズでは小さすぎるから、だれかMかLサイズの人はいるかしら…と考えていたら、右足もとで真っ黒な毛虫が道路を横切ろうとしている。へー事実さまは私の頭の中まで見えるのか、「現実を見よ」の喚起に喪服を着けた毛虫を送るとは。それとも、事実さまも喪に服しているという形で教えてくれたのかもしれない。


6/20

山門をくぐると300mほどの石畳の参道が本堂までつづき、その両側に7、8軒の寺院が建っている。そのうちの一軒は赤門で、本堂前の庭には四季を通して、珍しい種々の山野草が咲き誇る。小さな花々には白い小さな名札が埋まって、訪れる人の興味をそそる。門に続く参道の両側にびっしりと真っ赤な花が咲き乱れるツツジが植わっている。すでにツツジの盛りは終わって、今はなんの花が見れるのだろうかとしばらくぶりに訪れようと参道を覗くと、あの大きくなったツツジの並木がなくすっきりとしている。

赤門に近づくと花々を上手に咲かせ、世話を欠かさないお寺の内儀がせっせと刈り込みをしている。ツツジを伐採したことを聞くと「ツツジは今更新中です」と親切に言葉をつなげた。「植木屋さんでなく素人のものが手入れしているので、ツツジは上に伸びすぎて、これ以上伸びると根まで痛めてしまうので、新しい若枝を育てるために上部の幹を伐らなくちゃいけないんですよ」とぼっそり切られた幹の周りにはびっしりと若枝が伸びていて、それを剪定されている。人の世の生業と同じだ。伸びすぎて切られることがないのを幸いに、どれだけ若い芽をつぶして、根幹まで腐らしている輩の多いこと。

「これで、来年も花をつけますよ」。中庭の山野草を見せてもらい、お礼を言って去ろうとすると、「また、ぜひ見にいらしてください」と丁寧にご親切に返して下さった。里山のやり方で自然のままに雑草も含め、さまざまな花、樹木を育くんでいる。消毒はハーブ剤とのこと。小さな寺の庭でも自然にそって世話を重ねるのは、並大抵ではない。事実さまからの答えは、この里山庭園の見事さだ。

(千葉県市川市CLインストラクター)

 [目次へ戻る](#)